

(6) 2015 年度中期留学第 14 期生の選抜時と帰国後の英語力分析

中期留学委員会委員長 笠原 正秀

0 はじめに

本稿では、2015 年度中期留学第 14 期生（以下、14 期生と記す）の選抜時と帰国後の英語力の変化を、学生たちが 2014 年 12 月に受験した TOEIC IP（以下、TOEIC と記す）と帰国後の 2016 年 5 月に受験した TOEIC のスコアの変化を比較、分析をする。

最初に、14 期生全体の選抜時と帰国後の TOEIC の各項目別（Listening・Reading・Total、以下、TOEIC における項目とはこれらの 3 つを指す）平均値から、14 期生の英語力の全体的な傾向を把握する。次に、選抜時と帰国後の TOEIC の各項目別スコアをそれぞれ対応する項目間での相関を検討する。3 つめの視点として、中期留学（英語圏）協定校 5 校を留学先別に TOEIC の各項目に見られるスコアの変化を分析する。最後に、選抜時と帰国後の TOEIC のスコアの伸びを 14 期生全体と各留学先別に検討する。

以上の 4 つの観点から 14 期生の選抜時と帰国後の TOEIC のスコアを分析し、14 期生の英語力の変化について議論する。

1 14 期生全体の TOEIC の各項目別平均値—選抜時と帰国後の比較—

本項では、14 期生全体の選抜時（2014 年 12 月）と帰国後（2016 年 5 月）に受験した TOEIC の各項目別平均値を統計的に分析し、議論することを目的とする。14 期生全体の選抜時と帰国後の TOEIC の各項目別平均値は、以下に示す表のとおりであった（Table 1. および Table 2. 参照）。

Table 1. 選抜時の TOEIC の各項目の記述統計量

	度数	最小値	最大値	平均値	標準偏差
選抜時 Listening	24	235	405	301.46	42.821
選抜時 Reading	24	115	280	204.17	43.680
選抜時 Total	24	400	650	505.63	77.042

(N=24)

Listening の平均値が 301.46 点（最大値 405 点；最小値 235 点）、Reading が 204.17 点（最大値 280 点；最小値 115 点）、Total が 505.63 点（最大値 650 点；最小値 400 点）であった（Table 1. 参照）。

「2016 年度新入社員 TOEIC Listening & Reading 最新データ」（一般財団法人 日本ビジネスコミュニケーション協会、2016a）を参考に、14 期生の英語力を考えると、新入社員の TOEIC 平均スコアは、2014 年が 500 点、2015 年が 494 点、2016 年が 497 点となっている¹⁾。14 期生の選抜段階での TOEIC 平均 505.63 というスコアは、2016 年度の新入社員

¹⁾ 2016 年 4 月 1 日から 2016 年 5 月 31 日の 2 か月間に TOEIC Listening & Reading Test の団体特別受験制度（IP: Institutional Program）を利用した受験者を対象としたものである（一般財団法人 日本ビジネスコミュニケーション協会 a, 2016）。

のレベルの英語力であることがわかる。直近の過去3か年を振り返ってみても、2012年度（11期生）は選抜時の英語力として非常に高い平均スコアを示しているが、14期生の選抜時のスコアも決して悪くはない²⁾。また、例年の傾向ではあるが、Reading力とListening力に大きな隔たりのあることがわかる。この隔たりを、留学をとおして、いかにバランスよく伸ばしていくかが学生たちに課せられた課題と言えよう。

次に、14期生の帰国後のTOEICのスコアを見てみる（Table 2. 参照）。各項目とも、選抜時から比べ、平均値として大きく伸びていることがわかる。各項目の平均値は、Listeningが366.04点（最大値440点；最小値285点）、Readingが273.13点（最大値350点；最小値200点）、Totalが639.17点（最大値745点；最小値540点）となっている。

Table 2. 帰国後のTOEICの各項目の記述統計量

	最小値	最大値	平均値	標準偏差
帰国後 Listening	285	440	366.04	39.176
帰国後 Reading	200	350	273.13	43.833
帰国後 Total	540	745	639.17	65.003

(N=24)

帰国後の639.17点というスコアは、「TOEIC Program DATA & ANALYSIS 2016—2015年度 受験者数と平均スコア」³⁾（一般財団法人 日本ビジネスコミュニケーション協会、2016b）を参考にすると、上位35-40%あたりに該当するスコアである。また、英語を主たる言語とする国に6か月以上2年以内程度の滞在経験のある受験者の獲得しているスコアとほぼ同じ得点であることがわかる⁴⁾。その意味では、本プログラムは英語力獲得という意味では、その責務を十分に果たしているプログラムと言える。また、学生たちがListeningとReadingの各項目で獲得しているスコアのバランスと一般財団法人 日本ビジネスコミュニケーション協会（2016b）が示しているスコアのバランスはほぼ合致した結果となっている。しかし、選抜時の英語力で言及した点であるが、帰国後の英語力においてもReadingの力が一般財団法人 日本ビジネスコミュニケーション協会（2016b）で示されている半年以上2年以内の海外経験のある受験者に比べ、20点ほど劣っていることが見て取れる。一般財団法人 日本ビジネスコミュニケーション協会（2016b）のデータで平均600点を超えている業種（業界）は見当たらず、職種としては「海外」「法務」に携わっている受験者だけが平均600点を超えているだけである⁵⁾。本学部の中期留学経験者は、

²⁾ 過去3か年の中期留学選抜時の平均は以下のとおりであった：2012年度は526.3点；2013年度は460.2点；2014年度は481.4点。

³⁾ 2015年度（2015年4月から2016年3月）のTOEIC L&R・TOEIC S&W・TOEIC Bridgeの公開テストおよびIPテスト実受験者のデータに基づいたものである（一般財団法人 日本ビジネスコミュニケーション協会b, 2016）。

⁴⁾ 6か月以上1年以下（16,415人）：Total 655点；Listening 361点；Reading 294点、1年以上2年以下（8,255人）：Total 657点；Listening 361点；Reading 296点であった（一般財団法人 日本ビジネスコミュニケーション協会, 2016b）。

⁵⁾ 職種として「海外」に携わっている受験者（4,545人）の平均スコア679点：Listening 368点；Reading 310点、職種として「法務」に携わっている受験者（3,537人）の平均スコア606点：Listening 321点；Reading 285点であった。

十分そうした職種に就くにふさわしい英語力を身につけて帰国していると言えよう。また、標準偏差の数値も帰国後の Listening と Total において値が小さくなっており、バラつきの幅が小さくなったことを示している。これは学生たちの英語力のバラつきが小さくなってきた、つまり、英語力がまとまってきた証拠と見ることができる。

こうした 14 期生の選抜時と帰国後の TOEIC の各項目に見られる変化が、統計的にも有意であるのかを検証するために、 t 検定を実施した (Table 3. 参照)。その結果、Listening、Reading、Total のすべての項目において有意な差の存在が確認された (Listening : $t = 7.852$, $df = 23$, $p < .001$; Reading : $t = 7.185$, $df = 23$, $p < .001$; Total : $t = 9.730$, $df = 23$, $p < .001$)。つまり、14 期生の英語力 (Reading・Listening) は選抜時から比べて、帰国後、明らかに伸びているということが証明されたわけである。

Table 3. 選抜時と帰国後の TOEIC の各項目の t 検定

	対応サンプルの差					t 値	自由度	有意確率 (両側)
	平均値	標準偏差	標準誤差	平均値の 差の 95% 信頼区間 下限	上限			
帰国後Listening – 選抜時Listening	64.583	40.296	8.225	47.568	81.599	7.852	23	.000
帰国後Reading – 選抜時Reading	68.958	47.019	9.598	49.104	88.813	7.185	23	.000
帰国後Total – 選抜時Total	133.542	67.235	13.724	105.151	161.933	9.730	23	.000

本項では、14 期生全体の選抜時 (2014 年 12 月) と帰国後 (2015 年 5 月) に受験した TOEIC の各項目別平均値を統計的に分析し、議論を行ってきた。その結果、選抜時から比べ、帰国後の英語力 (Listening・Reading) は明らかに伸びていることが示される結果となった。また、その値は、2015 年度 TOEIC を受験した「海外」「法務」といった職種に就いている社会人の平均スコアと同様、もしくはそれに近い値であった。あくまでも平均値ではあるが、本学部の学生の多くがそうした方面、特に「海外」と接点のある業種に就職を希望する学生が多いことを考えると、2015 年度中期留学から帰国した学生たちは海外との接点のある業務に携われるだけの英語力を身につけて帰国していると言える結果であった。

2 14 期生全体の選抜時と帰国後の TOEIC の各項目別平均値に見られる相関

本項では、選抜時 (2014 年 12 月) と帰国後 (2016 年 5 月) の TOEIC の対応する各項目間の相関関係を議論する。次の Table 4. は、選抜時と帰国後の TOEIC の各項目間に見られる相関係数 (r : ピアソン積率相関係数、以下、本項でいう相関係数とはピアソン積率相関係数のことを指す) である。

Table 4. TOEIC の各対応項目間に見られる選抜時と帰国後のスコアの相関係数

	Pearson 相関係数	有意確率
選抜時 Listening — 帰国後 Listening	.520	.009
選抜時 Reading — 帰国後 Reading	.423	.040
選抜時 Total — 帰国後 Total	.563	.004

(N=24)

対応する各項目間の相関係数 (r) は、以下のとおりであった ; Listening : $r = .520^{**}$ ($p = .009$)、Reading : $r = .423^*$ ($p = .040$)、Total : $r = .563^{**}$ ($p = .004$)。すべての項目において「比較的強い相関がある ($\pm .40 < r < \pm .70$)」⁶⁾ と言える結果が示された。また、すべての項目において、その相関係数が有意であることも示された。14 期生においても、留学に出発する前の英語力が帰国後の英語力と比較的強く相関していることが証明された。つまり、留学する前に、より高い英語力を身につけておくことで、留学というプロセスの中で身につく英語力がより高いものになる、と言える。留学前の下準備が肝要ということである。

Table 5. では、対応する項目以外の項目との相関を確認した。上述の対応する項目間の相関については言うまでもなく、それ以外の項目間においても比較的強い相関がみられる。また、それらの相関にも有意な差が確認されている (Table 5. 参照)。

Table 5. TOEIC の各項目間に見られる選抜時と帰国後のスコアの相関係数

		1	2	3	4	5	6
1. 選抜時 Listening	Pearson 相関係数	—	.586**	.888**	.520**	.496*	.648**
	有意確率 (両側)		.003	.000	.009	.014	.001
2. 選抜時 Reading	Pearson 相関係数		—	.893**	.121	.423*	.358
	有意確率 (両側)			.000	.573	.040	.086
3. 選抜時 Total	Pearson 相関係数			—	.358	.515**	.563**
	有意確率 (両側)				.086	.010	.004
4. 帰国後 Listening	Pearson 相関係数				—	.224	.754**
	有意確率 (両側)					.293	.000
5. 帰国後 Reading	Pearson 相関係数					—	.809**
	有意確率 (両側)						.000
6. 帰国後 Total	Pearson 相関係数						—
	有意確率 (両側)						

** 相関係数は 1% 水準で有意 (両側)

(N=24)

* 相関係数は 5% 水準で有意 (両側)

⁶⁾ 相関の程度を表す日本語の表現および該当の相関係数の適用範囲の基準は、岩淵 et al. (1999) に従った。

その中でも注視したいのは、選抜時の Total スコアと帰国後の Reading スコアとの間に見られる相関である ($r = .515$, $p = .010$)。つまり、選抜時の Total スコアの高い者は帰国後の TOEIC の reading において高いスコアを獲得する傾向が高いと見ることができる。笠原 (2015) が指摘しているように、本学部の学生の英語力の弱点は読む力 (Reading) であり、留学というプロセスを経ても Listening のスコアほど伸びないのが Reading のスコアであり、例年の傾向でもある。この点については、後発の別項目で論じたい。

学生たちの Reading 力を伸ばすには、留学前の段階で英語力の底上げをしておく必要があると言える。選抜時における Listening 力および Reading 力と帰国後の Reading 力との相関はそれぞれ、 $r = .496$, $p = .014$; $r = .423$, $p = .040$ であり、「比較的強い相関がある ($\pm .40 < r < \pm .70$)」という意味では同区分内ではあるが、有意確率が 1%水準で有意であることをかんがみると、Reading 力の増強が英語力そのもの (全体) の強化につながると考えられる。

本項では、選抜時 (2014 年 12 月) と帰国後 (2016 年 5 月) の TOEIC の対応する各項目間の相関関係に着目し分析を行った。その結果、選抜時 (2014 年 12 月) と帰国後 (2016 年 5 月) の TOEIC において、対応する各項目間に比較的強い相関のあることが示された ($\pm .40 < r < \pm .70$)。また、それ以外の項目間にも同様の相関がみられた。留学をとおしてより高い英語力を身につけるには、留学前の段階でより高い英語力を身につけていることがカギであることも示された。

3 留学先別 TOEIC の各項目に見られる英語力の変化—選抜時と帰国後の比較—

本項では、選抜時 (2014 年 12 月) と帰国後 (2016 年 5 月) の TOEIC の各項目に見られる英語力の変化を留学先別に統計的に分析し、議論することを目的とする。最初に、選抜時の TOEIC の各項目の平均スコアを留学先別に報告する。その際、留学先グループ間に英語力の差の有無を ANOVA [分散分析] を行い検討する。もし留学先グループ間に英語力の差が認められた場合は、どの留学先間にその差があったのかを Tukey 検定を行い明らかにする。次に、帰国後の TOEIC の各項目平均スコアを留学先別に報告する。帰国後の結果に対しても、選抜時と同様、留学先グループ間に英語力の差の有無を、ANOVA を行い検討し、留学後の英語力に差が認められた場合は、どの留学先間に英語力の差が生じたのかを Tukey 検定を行い明らかにする。

Table 6. は、選抜時における留学先別の TOEIC の各項目別スコア平均値である。Listening に関しては E 校が最も高い平均値を示しており、それに続くのが B 校と A 校となっており、両校の平均値はほぼ横並びであることがわかる。全体の平均値を超えているのはこの 3 校だけであり、C 校と D 校 2 校の平均値は全体の平均値を大きく下回っており、ほぼ横並びとなっている。Reading に関しては E 校が最も高い平均値を示している。それに続くのが B 校、そして A 校となっている。C 校と D 校の 2 校に関しては Reading に関しても全体の平均値を下回る結果となっている。Listening と Reading の全体の平均値をみても、両者の間には 100 点近くの差があり、本学部の学生がいかに Reading 力不足であるかが見てとれる結果となっている。Total スコアにおいても E 校が最も高く、それに続くのが B 校と A 校となっている。Total スコア全体の平均値を下回っているのが C 校と D 校となっている。

Table 6. 選抜時の留学先別 TOEIC の各項目別結果⁷⁾

留学先		選抜時 Listening	選抜時 Reading	選抜時 Total
A校	平均値	312.50	216.25	528.75
	標準偏差	67.639	23.936	91.047
B校	平均値	313.00	223.00	536.00
	標準偏差	18.235	47.249	56.833
C校	平均値	275.00	154.00	429.00
	標準偏差	36.572	29.026	25.593
D校	平均値	273.75	182.50	456.25
	標準偏差	20.565	30.139	46.075
E校	平均値	325.00	236.67	561.67
	標準偏差	43.474	28.225	70.758
Total	平均値	301.46	204.17	505.63
	度数	24	24	24
	標準偏差	42.821	43.680	77.042

こうした見かけの数値と同様の差異が各留学先間に存在するのかを検証するために ANOVA を行った (Table 7. 参照)。その結果、Reading において、留学先別のグループ間に有意な差のあることが示された、 $F(4, 19) = 5.307, p = .005, \eta^2 = .528$ 。また、Total スコアにおいても留学先別のグループ間に有意な差のあることが示された、 $F(4, 19) = 4.280, p = .010, \eta^2 = .474$ 。

Table 7. 選抜時における留学先別 TOEIC の各項目別分散分析結果

		平方和	自由度	平均平方	F 値	有意確率
選抜時Listening * 留学先	グループ間 (結合)	11050.208	4	2762.552	1.686	.195
	グループ内	31123.750	19	1638.092		
	Total	42173.958	23			
選抜時Reading * 留学先	グループ間 (結合)	23156.250	4	5789.063	5.307	.005
	グループ内	20727.083	19	1090.899		
	Total	43883.333	23			
選抜時Total * 留学先	グループ間 (結合)	64704.792	4	16176.198	4.280	.012
	グループ内	71810.833	19	3779.518		
	Total	136515.625	23			

この結果を受け、どの留学先グループ間に Reading 力の差があったのかを確認するため、Tukey 検定を行った。その結果、B 校と C 校、E 校と C 校との間に統計上有意な差のあったことが示された。また、Total スコアに関しては、E 校と C 校の間に統計上有意な差のあったことが示された。

次に、帰国後の留学先別の TOEIC の各項目別スコア平均値を分析する (Table 8. 参照)。

⁷⁾ 各留学先別の度数 (n) は、留学先が特定されることを考慮し、掲載せず。

Table 8. 帰国後の留学先別 TOEIC の各項目別結果⁸⁾

留学先		帰国後 Listening	帰国後 Reading	帰国後 Total
A校	平均値	378.75	267.50	646.25
	標準偏差	43.661	61.169	95.775
B校	平均値	378.00	315.00	693.00
	標準偏差	39.781	32.977	48.036
C校	平均値	377.00	267.00	644.00
	標準偏差	37.014	22.528	54.014
D校	平均値	351.25	230.00	581.25
	標準偏差	11.087	43.589	50.724
E校	平均値	348.33	275.83	624.17
	標準偏差	50.365	29.397	47.897
Total	平均値	366.04	273.13	639.17
	度数	24	24	24
	標準偏差	39.176	43.833	65.003

帰国後の Listening に関しては、A 校、B 校、C 校の 3 校がほぼ横並びのスコアとなっている。平均値を超えているのはこれらの 3 校である。一方、D 校と E 校はほぼ横並びで上位 3 校に続いている。Reading に関しては、B 校が最も高い平均値を示しており、次に E 校、A 校と C 校がほぼ横並びとなっている。平均値を超えているのは B 校と E 校の 2 校となっており、他 3 校は平均値を割っている。こうした点からも、留学というプロセスを経ても Listening よりも Reading の方が実力のつきかたが弱いことがうかがえる。

こうした見かけの数値と同様の差異が各留学先間に存在するのかを検証するために ANOVA を行った (Table 9. 参照)。その結果、すべての項目において、留学先間で有意な差は発見されなかった、Listening: $F(4, 19) = .733$, $\eta^2 = .134$, *n. s.*; Reading: $F(4, 19) = 2.848$, $\eta^2 = .375$, *n. s.*; Total: $F(4, 19) = 2.078$, $\eta^2 = .304$, *n. s.*。つまり、見かけ上の数値では差異があるように見えるが、統計的には有意な差はないということが示された。

Table 9. 帰国後の留学先別 TOEIC の各項目別分散分析結果

		平方和	自由度	平均平方	F 値	有意確率
帰国後 Listening * 留学先	グループ間 (結合)	4718.125	4	1179.531	.733	.581
	グループ内	30580.833	19	1609.518		
	Total	35298.958	23			
帰国後 Reading * 留学先	グループ間 (結合)	16564.792	4	4141.198	2.848	.053
	グループ内	27625.833	19	1453.991		
	Total	44190.625	23			
帰国後 Total * 留学先	グループ間 (結合)	29575.000	4	7393.750	2.078	.124
	グループ内	67608.333	19	3558.333		
	Total	97183.333	23			

⁸⁾ 各留学先別の度数 (n) は、留学先が特定されることを考慮し、掲載せず。

留学前の選抜段階においては、留学先グループの間に、Reading と Total の2項目に有意な差が確認されたが、半年間の留学というプロセスを経て、どの留学先も同程度の英語力を身につけ帰国した、と言える結果が示された。

本項では、選抜時（2014年12月）と帰国後（2016年5月）の TOEIC の各項目に見られる英語力の変化を留学先別に統計的に分析し、議論を行った。最初に、選抜時の TOEIC の各項目の平均スコアを留学先別に報告し、ANOVA を行った。その結果、各留学先グループ間の Reading と Total に有意な差のあったことがわかった。具体的な留学先グループ間の差を確認するために Tukey 検定を行った。その結果、Reading に関しては、B校とC校、E校とC校との間に統計上有意な差があったことが示された。また、Total スコアに関しては、E校とC校の間に統計上有意な差があったことが示された。次に、帰国後の TOEIC の各項目の平均スコアを留学先別に報告し、ANOVA を行った。その結果、どの項目においても、留学先グループ間に有意な差は発見できなかった。つまり、選抜時には留学先グループ間に英語力の差はあったが、半年間の留学というプロセスを経て、どの留学先グループも同程度の英語力を身につけ帰国したと言える結果が示された。

4 留学先別 TOEIC の各項目の伸び—選抜時と帰国後の比較—

本項では、留学先別の選抜時と帰国後に見られる TOEIC の各項目の伸びについて検討する。分析には ANOVA を用いる。以下の表は TOEIC の各項目に見られる選抜時と帰国後のスコアの伸びを示したものである（Table 10. 参照）。

Table 10. 選抜時と帰国後に見られる留学先別 TOEIC の各項目の伸び⁹⁾

留学先	選抜時と帰国後の差			
	Listening	Reading	Total	
A校	平均値	66.25	51.25	117.50
	標準偏差	25.290	47.148	45.735
B校	平均値	65.00	92.00	157.00
	標準偏差	33.541	47.645	33.091
C校	平均値	102.00	113.00	215.00
	標準偏差	30.125	46.043	65.479
D校	平均値	77.50	47.50	125.00
	標準偏差	20.207	21.016	17.321
E校	平均値	23.33	39.17	62.50
	標準偏差	40.456	30.069	39.338
Total	平均値	64.58	68.96	133.54
	度数	24	24	24
	標準偏差	40.296	47.019	67.235

Listening に関しては、14期生全体で、平均値で 64.58 の伸びを示している。なかでも C校は平均値で 102.00 の伸びを示しているのは特筆すべき点である。逆に、E校の

⁹⁾ 各留学先別の度数 (n) は、留学先が特定されることを考慮し、掲載せず。

Listening の伸びの平均値が 23.33 にとどまっている。Reading に関しても同様の傾向が見られ、14 期生全体で、平均値で 68.96 の伸びを示している。C 校は平均値で 113.00 の伸びを示しているのは注目すべきところである。一方、E 校の Reading の伸びの平均値が 39.17 にとどまっている。選抜時と帰国後で、C 校と E 校の間に英語力の伸びに大きな変化が生じていることがわかる。

こうした見かけの数値と同様の差異が各留学先間に存在するのかを検証するために ANOVA を行った (Table 11. 参照)。その結果、すべての項目において、留学先間で有意な差が発見された、Listening: $F(4, 19) = 4.367, \eta^2 = .479, p = .011$; Reading: $F(4, 19) = 3.281, \eta^2 = .409, p = .033$; Total: $F(4, 19) = 8.802, \eta^2 = .650, p = .000$ 。

Table 11. 選抜時と帰国後の留学先別 TOEIC の各項目の伸びに対する分散分析結果

		平方和	自由度	平均平方	F 値	有意確率
選抜時と帰国後の差 Listening	グループ間	17888.750	4	4472.188	4.367	.011
	グループ内	19457.083	19	1024.057		
	Total	37345.833	23			
選抜時と帰国後の差 Reading	グループ間	20774.375	4	5193.594	3.281	.033
	グループ内	30074.583	19	1582.873		
	Total	50848.958	23			
選抜時と帰国後の差 Total	グループ間	67531.458	4	16882.865	8.802	.000
	グループ内	36442.500	19	1918.026		
	Total	103973.958	23			

この結果を受け、どの留学先グループ間にそれぞれの項目の差があったのかを確認するため、Tukey 検定を行った。その結果、Listening に関しては C 校と E 校、Reading に関しては C 校と E 校、Total に関しては B 校と E 校、C 校と A 校、C 校と D 校、C 校と E 校の計 6 か所に統計上有意な差のあることが示された。C 校に関しては、選抜時において Listening が 275.00、Reading が 154.00、Total が 429.00 であった。帰国後は、Listening が 378.00、Reading が 267.00、Total が 644.00 となっている。留学というプロセスを経て大きく英語力を伸ばしたグループである。

本項では、留学先別の選抜時と帰国後に見られる TOEIC の各項目の伸びについて検討した。その分析にあたっては ANOVA を用いた。その結果、Listening については 5 校平均 64.58、Reading については 5 校平均 68.96 の伸びを示していた。その中であって顕著な伸びを示したのが C 校であった。Listening が 102.00、Reading が 113.00、Total で 215.00 も伸びていた。また、留学先間でその伸び方に差があるのかを調べたところ、Listening に関しては C 校と E 校、Reading に関しても C 校と E 校、Total では B 校と E 校、C 校と A 校、C 校と D 校、C 校と E 校に有意な差が生じていることが明らかになった。この結果からもわかるように、各項目において顕著な伸びを示したのは C 校とみることができる。

5 おわりに

本稿では、14 期生の選抜時と帰国後の英語力の変化を、学生たちが 2014 年 12 月に受験した TOEIC と帰国後の 2016 年 5 月に受験した TOEIC のスコアの変化を比較し、分析した。

最初に、14期生全体の選抜時と帰国後のTOEICの各項目別平均値から、14期生の英語力の全体的な傾向を把握した。その結果、選抜時から比べ、帰国後の英語力（Listening・Reading）は明らかに伸びていることが示された。また、その値は、2015年度TOEICを受験した「海外」「法務」といった職種に就いている社会人のTOEIC平均スコアと同様もしくはそれに近い値であった。その意味では、2015年度中期留学から帰国した学生たちは、本学部の学生たちが希望するような、海外との接点のある業務に携われるだけの英語力を身につけて帰国している、と言える結果が示された。

次に、選抜時と帰国後のTOEICの各項目別スコアをそれぞれ対応する項目間での相関を分析した。その結果、選抜時（2014年12月）と帰国後（2016年5月）に受験したTOEICの対応する各項目間に比較的強い相関のあることが示された。また、それ以外の項目間にも同様の相関がみられた。留学をとおしてより高い英語力を身につけるには、留学前の段階でより高い英語力を身につけていることがカギであることが指摘された。

3つめの視点として、中期留学（英語圏）協定校5校を留学先別にTOEICの各項目に見られるスコアの変化を分析した。まず、選抜時のTOEICの各留学先別各項目平均スコアにANOVAを行った結果、各留学先グループ間のReadingとTotalに有意な差のあったことがわかった。具体的に差の生じた留学先グループを特定するためにTukey検定を実施した。その結果、Readingに関しては、B校とC校、E校とC校との間に統計上有意な差があったことが示された。また、Totalスコアに関しては、E校とC校の間に統計上有意な差のあったことが示された。帰国後のTOEICについても同様の分析を行った。その結果、どの項目にも留学先グループ間に有意な差は発見されなかった。つまり、選抜時には留学先グループ間に英語力の差はあったが、半年間の留学というプロセスを経て、どの留学先グループも同程度の英語力を身につけて帰国したと判断できる結果が示された。

最後に、選抜時と帰国後のTOEICのスコアの伸びを14期生全体と各留学先別にANOVAを使い分析した。その結果、Listeningについては5校平均64.58、Readingについては5校平均68.96の伸びを示していることがわかった。なかでもC校の伸びは顕著であったことが示された。また、留学先間でその伸び方に差があるのかを分析したところ、すべての項目において有意な差が生じていることが明らかになった。

本稿ではその検討は行わなかったが、これまで何度となく中期留学から帰国した学生たちの英語力分析を行ってきた経験から、中期留学という約6-7か月の語学留学により、年度ごとの集団としての平均値での英語力の上限、あるいは年度ごとの集団としての英語力の伸び方に上限があるのではないかと感じている。そう感じさせたのは、例年、中期留学説明会で示している、年度ごとの選抜時と帰国後の英語力の伸びを示したグラフからである（笠原，2016；Figure 1.参照）。もちろん、個々人のレベルではなく集団のレベルでのTOEICの平均スコアにおいてである。

下図は選抜時と帰国後の英語力を測定するものとしてTOEICを、その両方で使うようになった6期生以降からのデータである。1期生から5期生まではTOEFL ITP（以下、TOEFLと記す）を利用していた。ただし、5期生に関しては、選抜時はTOEFLを利用したが、帰国後の英語力の測定にはTOEICを利用した。5期生がその過渡期となった時期である。TOEFLからTOEICに試験を切り替えたもっとも大きな理由は、就職活動などでも使える社会的認知度の高さがあげられる。

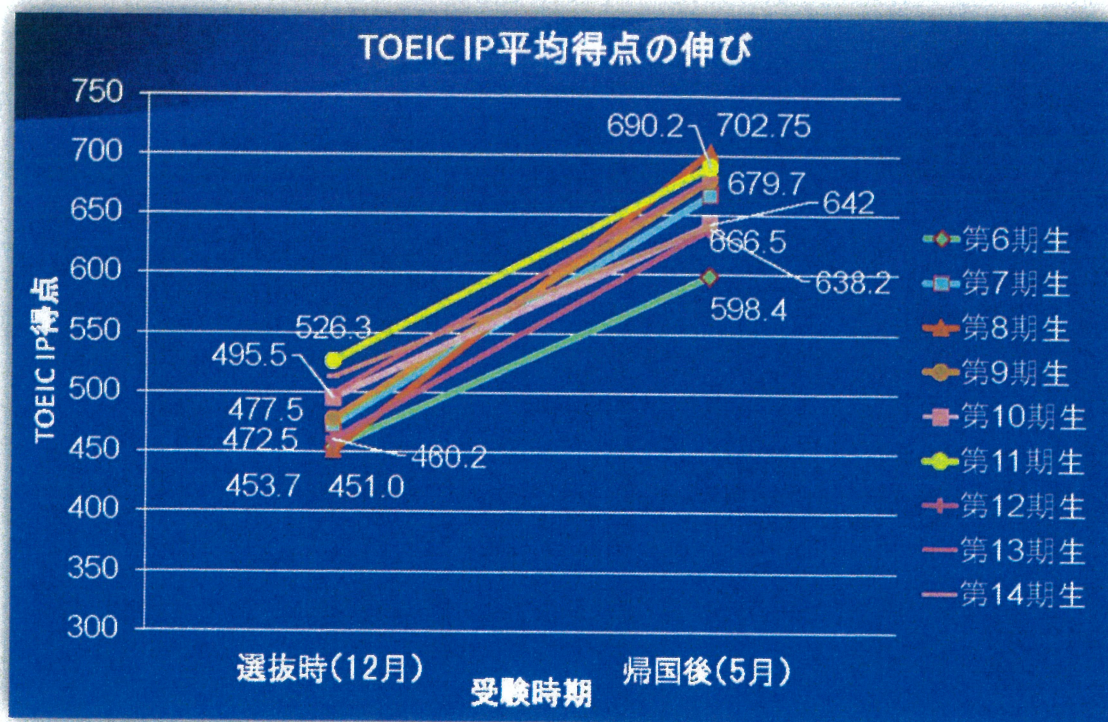


Figure 1. 選抜時と帰国後の英語力の伸び (6期生から14期生まで)

このグラフを見てのとおり、選抜時と帰国後の TOEIC の平均 Total スコアは毎年同じような角度での右肩上がりの直線を描いていることがわかる。選抜時の TOEIC の平均 Total スコアは 451.0 から 526.3 までバラつきがあり、また帰国後の TOEIC 平均 Total スコアにも 598.4 から 702.75 までバラつきがある。そのため、帰国後の TOEIC における英語力の上限を一般化するのは難しいのかもしれないが、同じような角度で右肩上がりの直線を描いていることから、英語力の伸び方には一般化できるものがあるのではないかと考えている。15 期生の英語力分析では、この点も検討項目の 1 つとして取り入れ分析をしてみたい。

(2017 年 2 月 19 日脱稿)

6 引用文献

- 一般財団法人 日本ビジネスコミュニケーション協会 (2016a) 2016 年度新入社員 TOEIC Listening & Reading 最新データ Retrieved from http://www.toeic.or.jp/library/toeic_data/toeic/pdf/data/new_recruits.pdf (2016 年 11 月 26 日)
- 一般財団法人 日本ビジネスコミュニケーション協会 (2016b) TOEIC Program DATA & ANALYSIS 2016—2015 年度 受験者数と平均スコア Retrieved from https://www.toeic.or.jp/library/toeic_data/toeic/pdf/data/DAA.pdf (2016 年 11 月 26 日)
- 岩淵千明編著 浦光博・石井滋・西田公昭・神山貴弥 (1999) あなたもできるデータの処理と解析 福村出版
- 笠原正秀 (2015) 2014 年度 中期留学 第 8 期生の選抜時と帰国後の英語力の変化 2014 年度 中期留学報告書 pp. 54-65 椋山女学園大学 国際コミュニケーション学部
- 笠原正秀 (2016) 選抜時と帰国後の英語力の伸び 2017 年度 中期留学説明会資料